

アイデアは決して的外れではありません。もちろん、そのためには遺跡保存の措置ならびに観光者との良好な関係を取り結ぶ仕掛けが必要であり、遺跡保存整備がそうした役割を担うことになります。もちろん、遺跡を保存整備すれば、観光資源となりうるということではありません。個々の遺跡の観光資源としての資質が大きく関係するからです。また、観光資源とはなりえても地域が観光地として立ち行くとも限りません。観光資源として単独で魅力的な遺跡はきわめて少ないし、良好な観光地であるためには良好な観光施設も不可欠な要素であるからです。

遺跡研究室で昨年からおこなっている大規模遺跡の整備・管理・活用に関する研究では、こうした観光と遺跡の関係という視点も含めたアプローチをおこなっているところです。

(文化遺産研究部 小野健吉)



白水阿弥陀堂（福島県いわき市）

園池を発掘・整備し、観光資源的価値を増進

平城宮跡第一次大極殿正殿復原工事

文化庁が進めている平城宮跡第一次大極殿正殿復原工事は、基壇下部の凝灰岩化粧工事を完成させました。大極殿正殿本体は、基壇内の免震装置を本年4月半ばから設置し始める予定で、基壇上面の完成は来年2月末になる予定です。2003年2月末現在、



大極殿基壇全景（南東から）

素屋根の建設基礎工事に着手しており、完成は2004年1月末の予定です。写真は、今年1月初めの工事進捗状況です。

(平城宮跡発掘調査部 渡邊康史)

研究室紹介

保存修復科学研究室（埋蔵文化財センター）

Conservation Science Laboratory

保存修復科学研究室は、遺跡・遺物の保存と修復に関する科学的調査・研究をおこなっています。基礎研究として遺跡の構築部材や出土遺物に関する材質および構造研究と新しい調査法に関する開発研究もおこなっています。また、平城宮跡などから出土した遺物の実際的な処理をおこなうと同時に、技術的開発研究とその実用化もすすめています。

当研究室では、これらの新しい調査法や保存修復技術に関する情報を、学会や保存科学研究集会をはじめ、地方公共団体の発掘技術者を対象とした保存科学研修などを通じて公開しています。また、協力事業の一環として、地方公共団体などがおこなっている発掘調査や整備事業において、遺物の取り上げや応急処置をはじめ遺構の修復処理や復元法に関する専門的・技術的指導と協力をおこなっています。これらの活動は国内だけではなく、広く海外にもおよびます。2002年度は、ユネスコが実施したクムトラ千仏洞における現地環境調査と壁画顔料の材質調査の協力をはじめ、中国・炳靈寺文物保護研究所（甘粛省）が実施した涅槃塑像の修復事業の協力やイースター島・モアイ石像の保存処理に関する基礎研究をチリ国立文化財保存修復研究所と共同で実施しました。

最近おこなった開発研究では、オートラジオグラフィを利用した材質調査があります。この方法は遺物から発生している微弱な放射線を二次元放射線検出器としてのイメージングプレートに放射線エネルギーとして蓄積する方法で、レーザー励起によるルミネッセンス量をデジタル化して数量化・画像化することによって古代ガラス材質の同定を可能としました。この開発によって一度に数百点の古代ガラス遺物の材質同定が可能となり、日本列島における古代ガラスの流通が解明されることが期待されます。将来は、さらに他の遺物へと応用が広がる画期的な